
コンプレックス。

杉浦 鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンプレックス。

【Zコード】

Z0887A

【作者名】

杉浦 露

【あらすじ】

あたしのコンプレックスはこの手。小さい頃からずっと袖の中に隠し続けてきた。中学生になつたあたしは、とうとう初恋を迎える。更にコンプレックスを隠しながらも、裏腹に少しでも綺麗になりたいと努力するあたし。しかしついに初恋の人にはコンプレックスを見付けられてしまう。コンプレックスなんて、きっとふとしたきつかけで無くなっちゃうんだって！そんなことを言いたかったんです（笑）

あたしの「コンプレックス」…それはこの手である。

太くて短い指。

指の長さより面積の大きい掌。

そして…何よりも大嫌いな小さくて不格好な爪…。

物心ついた時には既に格好悪い手だった。

おまけに爪を噛む癖があつたから、爪はいつだつて短くてガタガタして…。

よく小学生の頃なんかにあつた『身だしなみチェック』なんかで、先生に

「爪を切つてこなきや駄目じやない」

なんて一度は怒られたりするものだろうが、あたしのこれまでの人生には一度たりと

「長すぎる」

なんて言われた事はない。

この手があたしの「コンプレックス」と決定的に位置付けた出来事がある。

小学5年生の時、友達の友達…つまりはあたしとは特別仲も良くない女の子に言われた一言。

その子は小学生にしては体も発達していて、かなりの『マセガキ』だった。

当然お洒落にもいち早く目覚めている。

一方あたしは地味で平凡な小学生で。

ある日そんな平凡小学生にマセガキが言ったのだ。

「わあ～舞ちゃんの爪つてすつ～じい深爪なんだね！痛くないの？見せて見せて～触つていい？」

まるで物珍しい玩具にでも触るかのように。

その子の手は、そりゃあもう爪も形が綺麗だし、指も細くて長くて、

ちゃんと手入れが行き届いていて。

まさしく女の子の手だった。

それに比べてあたしの手は…なんて汚いんだろう。

それ以来あたしは手が完全にコンプレックスとなつた。

常に手を隠して、袖の長い服ばかり着るよつこした。

* * * * *

中学生になつても相変わらずあたしの手は汚かつた。

中学なんて特に爪の長さに敏感だつたりするから、容易に爪を伸ばすことも出来ない。

適度な長さで切り揃えても、深爪で指も短いこの手では、あの子みたいに女の子の手になるわけもない。

あたしの両手は相変わらず長い袖の中にあつた。

確かに相変わらずあたしではあつたけれど、思春期は誰しもが成長するものらしい。

こんなあたしもつこに初恋などをしてしまつたのである。

相手は同じ委員会でクラスも一緒の男の子。

決して格好いいわけじゃなかつたけれど、クラスの人気者つてタイプだつた。

あたしとはいつも戯れあつてて、ケンカ友達つて感じで。

まあそいつに女の子として意識されてなかつた事だけは断言できる。

毎日そいつとふざけあつてるのが楽しくて。

あたしの中でそいつはいつの間にか特別な存在になつていつた。

だからかな…そいつに手を見られないよう必死に隠して。

この手を見られて、嫌われるのが怖かった。

そいつと戯れあいつつも、この手でそいつに決して触れることがないように気を付けた。

だけどそのくせ妙に色氣づいたりとかして…短かつた爪をこっそり伸ばし始めた。

そのうち自然と爪を噛む癖はなくなつていて、先生にバレないよう透明なマニキュアを生まれて初めて塗つたのもこの時だ。

相変わらず手は隠していたけれど…。

* * * * * * * * ある日、委員会でクラスごとに田頃の成果を模造紙にまとめて一斉掲示することが決定した。

委員は各クラス男女一人ずつだから、あたしのクラスはあたしといつ。

放課後残つて模造紙を作成しなければならない。

あたしは真面目な生徒だったから毎日残つて作業してたけども、そいつはそういう仕事みたいなものがてんで駄目な奴で、面倒がつて中々協力してくれない。

結局作業するのはいつもあたしだけだった。

毎日毎日あたしは独りで教室に残つた。

大きな模造紙に文字や絵をたくさん書いていく。

今日もやつぱり独り。

孤独な作業も、頑張つていくうちにだんだん楽しくなってきて、1番いいものを作つてやろう！なんて内心張り切りだしていた。

今日も頑張るぞーー無駄にやる氣になつて、独りなのをいいことに腕巻りをする。

露になる手。

爪はだいぶ伸びて、漸くみんなと同じくらいの長さになつていた。

作業を始めて數十分経つたとき、ふいに教室が開く音がした。びっくりしてドアに目をやる。すると立っていたのはそいつ。

「何…してんの…？」

帰つたとばかり思つていたので、突然の登場に動搖してしまつ。

「帰ったんじゃなかつたの？」

すると不機嫌そうな顔して口を開いた。

「帰つてねえよ。いつも学校に居たし。」

「じゃあ手伝えばよかつたじやん。」

知らなかつた。まさかまだ学校に居たなんて。

「部活だつたんだよ。もつすぐ最後の大会だから。」

「あ…そつか。」

あたしは文化系の部活だから、部活に関してはたいして活動もしてなかつた。

逆にそいつは陸上部で長距離ランナー、他にも水泳で表彰されちゃうほどの選手でもあつた。

「それなら初めから言つてよ。じゃ今日も練習か〜。」

「いや…手伝つ。」

「こいつに来るとあたしの向かい側に座り込んで、黒マジックのキヤップを外した。

「今日は…練習休ませてもらつてきたから。」

「こいつちは大丈夫だよ? ここから練習行けって。」「うるせえよ。」

なんて言つてあたしの言葉は無視。

仕方がないので、今度は一人で作業を再開した。

黙々と仕事をこなしていく。

何故だかいつもみたいにふざけた雰囲気にはなれなかつた。

「悪かつたな。」

ふいにそいつが口を開いた。思わずあたしは声の方へ目を向ける。

「こつも藤田ばかりに仕事押し付けちゃつてさ。」

初めて見るような顔をしていきなりそんな言葉を吐くから、益々雰囲気が固くなる。

「どうした…？ 急に…」

あたしまで何だか胸がきゅっと苦しくなつてきて。

「別に… 言つてみただけだよ。」

それだけ言つと、そいつはそれっきり口を開けてしまつた。

あたしは上手い言葉も見当たらなくて、止まつていた手を再び動かした。

気付けばもう口もだいぶ傾いていて、窓から私達の方へ緋色の光が差し込んでいた。＊＊＊＊＊＊＊＊

「藤田の手… 綺麗なんだな。」

あれつきり言葉もなく、沈黙が支配した教室にそいつの声が反響した。

そいつの手は腕捲りしたままペンを動かすあたしの手をじつと見つめていた。

はつとしてあたしはペンを落とし、急いで袖を下ろした。

こんな手を好きな人に見られるのが怖かつた。

「なんで隠すんだよ。」

動搖したあたしのおかしな行動に怪訝そうな顔をする。

「せつかく誓めたのに。」

「やめてよ、こんな手…」

見られてしまつたショックで涙が出そう。

「初めてちゃんと見たけど、意外と綺麗じゃん。」

「大嫌い… 最悪だよ、こんな手。」

懸命に涙を堪えた。

そいつの前で泣くわけにはいかなかつた。

泣いたら何かが壊れてしまうような気がして… ただ下を向いて、いつもみたいに手を袖の中へ隠して、あたしは必死で下唇を噛み締め

ていた。

二人きりの放課後の教室はどちらかが声を出さない限り静かで。あたしは涙を我慢するのって大変なんだなあなんて無駄なことを考えたりとかしていて。

そいつはそいつでこの重苦しい空気に、居心地が悪そうにもどもぞして。

意を決して口を開いたのは…あたしじゃなく。

「今日一緒に帰ろうぜ。もう暗いし。」

一緒に帰るつていつも、あたしとそいつじや家が正反対なのに。

「方向違うじゃん。」

震える声であたしが精一杯の毒を吐く。

「…本当に可愛くねえなあ。」

呆れたような声。可愛くないことなんて随分前から自覚してるもん。

「お前も一応女みてえだから、夜道を独りで帰つたら危ねえだろ。」

一気に涙が引いて顔が熱くなる。予想だにしない発言。

「つむさい。仕方ないから送らせてやってもいいけど…」

照れ隠しの一言。女の子らしさの欠片もない。

「それが物を頼む態度かよ…しょうがねえから送つてやるけど…。」

* * * * * * * * 初めてそいつと一緒に帰つた。

横に並ぶのは恥ずかしくて、あたしはそいつの一歩後ろを歩いた。距離とか微妙すぎて解らなくて、とりあえず出来るだけ離れるようにした。

あたしが少しずつ離れていくから、そいつは何度も何度も立ち止まつては振り返る。

「遅えよー。」

「そつちが早いんだつて！」

嘘だけど…だってあんまりくつづいて歩いちゃいけない気がして。

“立ち止まつては振り返る”をそいつは5回繰り返して、6回目でとうとう痺れをきらしたのかあたしの前まで駆けてきた。

「いれじゅ も一緒に帰つてゐる意味ねえだらー。」

そう言つて、あたしの右手を掴む。

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ

「一緒に帰ろうって、俺言つたよな？」

無理矢理手を繋いだ形になつてしまつた。どうしても隣に並ぶこと

もうあたしはこの状況についていけない。

おまけにパンフレットの手を握られているのだ

モニ〇が向かうにかかじが、あた〇お金く聞かへて二はか〇。

「これって手繫いでるみたいじゃん！ねえ！？」

卷之三

ナレドアたしな手を離そつともがくばかり。

ついにそいつはぐつと繋いだ右手を自分の方へ引き寄せる。

必然的に体が接近する」とになると、同じ場所

「あのな、俺は！俺はお前の手を結婚だと思った。何か知らねえけど、お前はいつも手隠してつけど…隠すことねえよ。堂々としてりやいいんだよ。」

「ひいた」とか、そいつが「きなり変な」とを言い出して、あたしの動きが止まってしまう。だけど頭の中は余計に混乱。

何なんだ…？これはどうしたことか…？

何? あんた、あたしのこと好きなの?

「ハアッ！？好きじゃねえよーがけんなよー！」

「思わず吹き出しちゃった。そんなに必死に否定しなくても…。」
「だつ…だけどいつも偉そうなお前が、手え隠してんのが気になつ

てただけだよ。」

相変わらず真っ赤な顔で呟いた。
釣られてあたしも真っ赤になつた。

とりあえずそいつの気持ちだけは伝わってきて、もう少しだけこの手をそいつと繋いでてもいいかな、なんて思った。*****

* * *

「…ありがとう。」

「…おう。」

日も暮れた帰り道を一人手を繋いで歩いた。
手は暖かくて、心も同じように暖かかった。
あたしは好きな人が好きだと言ってくれたこの手を、もう少し大事にしてやろうかと思つた。

(後書き)

微妙なお話でしたが…初恋の淡い気持ちを思い出して貰えると幸いです。コンプレックスは克服するためにあるのかもしだせんね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0887a/>

コンプレックス。

2010年10月28日05時35分発行